

福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	1. 片頭痛と脳波異常を伴った不思議の国のアリス症候群の一例 (第33回福島県精神医学会学術大会抄録)
Author(s)	佐藤, 亜希子; 板垣, 俊太郎; 横倉, 俊也; 和田, 知紘; 赤間, 孝洋; 木村, 聡; 鈴木, 雄一; 松田, 希; 三浦, 至; 矢部, 博興
Citation	福島医学雑誌. 72(2): 88-88
Issue Date	2022
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1886
Rights	© 2022 福島医学会
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2022-11-26T22:29:58Z

第33回福島県精神医学会学術大会抄録

日時：2022年2月20日（日） 10:00~14:10

場所：福島県立医科大学 神経精神医学講座【WEB開催】

1. 片頭痛と脳波異常を伴った不思議の国のアリス症候群の一例

¹⁾福島県立医科大学医学部 神経精神医学講座

²⁾新田目病院

³⁾東北病院

⁴⁾竹田総合病院 こころの医療センター

⁵⁾一陽会病院

⁶⁾福島県立医科大学医学部 小児科学講座

⁷⁾福島県立医科大学医学部 脳神経内科学講座

佐藤亜希子¹⁾, 板垣俊太郎¹⁾, 横倉 俊也¹⁾²⁾

和田 知紘¹⁾³⁾, 赤間 孝洋¹⁾⁴⁾, 木村 聡¹⁾⁵⁾

鈴木 雄一⁶⁾, 松田 希⁷⁾, 三浦 至¹⁾

矢部 博興¹⁾

不思議の国のアリス症候群（Alice in Wonderland syndrome: AIWS）はルイス・キャロルの児童文学にちなんで1955年にToddが提唱した、自己身体の変容感を中核症状とし、視空間知覚、時間知覚、聴覚認知などの変容感、離人感などを周辺症状とするものである。EBウイルス感染症、脳幹性前兆を伴う片頭痛、側頭葉てんかんの単純部分発作である錯覚発作などが原因となることが多いが、種々の精神疾患、脳器質疾患でも生じうる。中でも時間感覚の異常はてんかんやADHDなど多くの疾患で出現し、時間感覚を担う脳領域としては大脳基底核、小脳、側頭葉、後頭葉、前部島皮質等が想定されている。一方、原因疾患として多い片頭痛とてんかんは頻度が高く一過性発作性脳疾患であるなど様々な共通性があるが、その関連性は十分に解明されていない。

症例は13歳の女兒。幼少期から時間知覚の変容の体験があり、X-2年から頭痛、X年6月に小人の幻視やフィルターのように景色に色がつく視覚異常が出現。小児科での治療で改善に乏しく、不眠や不登校傾向が続き心因が疑われ、X年10月当科を紹介受診。脳波検査でてんかん性異常（双極誘導で右後側頭部に位相逆転、単極誘導でT6に最大振幅とする鋭波の散発）を認め、MRI（T2, FLAIR）で右後頭部白質に高信号を示す小領域を認めた。脳神経内科と協議の上、てんかん性異常、あるいは片頭痛に基づくAIWSを想定し片頭痛治療に加えて抗てんかん薬投与を行った。また、幻視については

AIWSだけで説明するには明瞭で具体的すぎるため、解離症状による修飾を想定し、家族内力動の聴取と調整を行った。本会では、本症例のAIWSにおける片頭痛及び脳波異常の病態への関与を中心に文献的考察を加えて発表する。

尚、本発表は本学の倫理規定に基づき、プライバシーに関する守秘義務を遵守し匿名性の保持に十分配慮した。

2. PLMT 症候群の加療中に複雑性幻聴を生じ、その内容に連動した不随意運動を報告した高齢女性例の脳神経基盤についての考察

¹⁾日本赤十字社 福島赤十字病院 精神科

²⁾福島県立医科大学医学部 神経精神医学講座

³⁾東北大学災害科学国際研究所 災害精神医学分野

穴戸 理紗¹⁾²⁾, 國井 泰人²⁾³⁾, 山本慎之助¹⁾

藤森 春生¹⁾, 佐藤亜希子²⁾, 板垣俊太郎²⁾

三浦 至²⁾, 矢部 博興²⁾

複雑性幻聴には人の声として認識される言語性幻聴があり、自己所属感の低下によって、自生思考から考想化声、会話形式の幻聴、自身の行動に注釈をする幻聴へと様式が変化すると考えられている。言語性幻聴は統合失調症の診断において重要視されることが多く、高齢者では新規に生じることとは稀とされている。一方、painful legs and moving toes (PLMT) 症候群は、中年期以降の女性に多く発症する、片側または両側の足趾の痛みと不随意運動を伴う稀な疾患であり、原因不明の場合が多く難治性である。今回、PLMTの神経内科治療経過中に、数を数える女の声の幻聴が生じ、その後考想化声へと発展した70代女性の症例を経験した。幻聴は、「女の人が数字を唱える声」として出現し、徐々に数字や単語が脳内で繰り返し反復して聞こえるようになり、さらにその内容に連動して手足や体が勝手に動くようになったという。その後も同症状が続きその対応に難渋した神経内科より精神科紹介となった。当初、晩発性の統合失調症や妄想性障害が鑑別に挙げられたが、発症年齢が遅いこと、病識が明瞭であること、幻聴症状が主であること等からそれぞれ否定され、器質性幻覚症として精査を行ったところ、SPECT検査で楔前部の血流低下が認められた。楔前部は、アルツハイマー型認知症の初期に血流が低下することが良く知られているが、他に、alien hand 症候群での非自発的な運動との関連も報告さ